

勇者じゃないと追放された

最強職【なんでも屋】は、

スキル【DIY】異世界を  
無双します

3

Kaede Hanaoto

著 華音楓

絵 ファルケン

## 登場人物紹介

### シュミット公爵

カイトの後ろ盾  
となった貴族。

### シャバズ

冒険者ギルドの  
ギルドマスター。

### キャサリン

冒険者ギルドの  
受付嬢。

### デージー

エルダの幼馴染の  
冒険者。魔弓士。

### ポール

エルダの幼馴染の  
冒険者。盾使い。

### 石立海人

本編の主人公。25歳、サラリー  
マン。異世界に召喚されるが、勇  
者ではなかったため追放され、冒  
険者として生計を立てることに。

### エルダ

冒険者の魔法使い。  
カイトのパーティー  
メンバー。

## ■二十五日目 ヘタレと秘密と今後の予定

サラリーマンだった二十五歳の俺——石立海人<sup>いだてかいと</sup>は、勇者を必要とした異世界の王様によって召喚された。しかし、職業が【なんでも屋<sup>や</sup>】で所持スキルが【DIY】だったため、城から追放されてしまう。もちろん日本に帰る方法など教えてもらえなかった。そのため、俺は当面の間、冒険者として生きていくことにした。

ありがたいことに、魔法使いのエルダがパーティーメンバー兼同居人になってくれたので、異世界の知識はなんとかなっている……多分。

また、複数の職業スキルが使える【なんでも屋】と、素材とレシピがあればなんでも作れる【DIY】のおかげで、各ギルドと有力貴族のシュミット公爵<sup>こうしき</sup>が後ろ盾<sup>だて</sup>になってくれて、生活は安定しそうだった——

ギルド会議で疲れ果てて眠ってしまったエルダをおぶって帰った翌日。

この日はいつもと違っていた。

朝目が覚めると、隣には……

なんてことにはならないからね？

ヘタレです……

ごめんなさい。

帰ってきた後、ちゃんとエルダを彼女の部屋のベッドまで運んで、俺は自室で寝ました。

やましいことなんて全くしなかったよ。

それに、そのまま部屋にいて「え？　いつまでそこにいるの？」って嫌な顔されたら、本気で家出するレベルで恥ずかしいじゃないか……

というわけで、俺はヘタレじゃなくて空気の読める紳士<sup>くんし</sup>だつてことを、ここに宣言する！！

そんなことはどうでもよくて、いや、どうでもよくないか？　まあいいや、今日からの活動について考えなくては。

昨日の会議で、各ギルドに渡りをつけることに成功した。

しかしそれは、あくまで「協力関係を築いた」に過ぎない。

互いに信頼できるようになるかは、まだまだこれからの付き合い方次第つてところだろうか。

俺と一緒に召喚され、本当の勇者らしい会社の後輩——西森樹莉亜<sup>にしのもりあ</sup>の情報については、入り次第教えてくれるつていうから、それは甘えておこう。

どうせ俺が動いたところでわかるわけではないんだから。

それと、少し意外だったのが、商業ギルド以外から俺の後ろ盾<sup>うしろだて</sup>になることに対して見返りが要求

されなかったことだ。

てつきり何かを要求してくるかと思つていた。

特に、薬師<sup>くすり</sup>ギルドは一切動きを見せなかった。

ただ、ギルマスのルドルフさんの視線が強烈だったのは覚えている。

危機感<sup>あせ</sup>というか焦り<sup>あせ</sup>というか……

そんな感情を含んでいるように見えた。

とはいえ、敵対しようとかさういつた感情ではないと思いたい。

逆に要求がないことが不気味に思える。

むしろ、要求してきた商業ギルドのドルーの方が信用できるつてことが不思議でならない。

彼とは、あくまでも対等だった。

向こうがこれを出すから、こっちはこれを出す。

win-winな関係。

ドライと言えばドライだし、ビジネスライクと言えばビジネスライクだ。

だけど、そこにはある一定の信頼関係が構築されている。

『商人とは、相手からの信頼を得て、己の利益を最大限に高めるもの』とは、よく言つたものだな。確かに昨日の会議ではドルー——商業ギルドの信頼度が上がつて、さらに収納箱（簡易）という利益を得ていったんだから。

本当に狸<sup>たぬき</sup>どもの化かし合いは好きになれないな。  
というよりも、ごく一般人の俺を巻き込むよって思う。  
こればかりは仕方がないけどね。

身支度を終えた俺は、一階のリビングへ下りていこうとした。  
リビングではエルダがすでに起きてくつろいでいる。

珍<sup>めず</sup>しく部屋着のままで。

よく見ると、ソファアの上でクッションを抱いて、ジタバタしたり、突然止まってはクッションに顔をうずめたりと、せわしない動きをしていた。

一体何をしているんだろうと、下りるに下りられなくなってしまった。

俺が階段の途中で足を止めていたら、不意にエルダと目が合う。

「え？」

エルダは動きを止めて硬直してしまった。

みるみる顔が赤くなり……

いつも以上に俊敏<sup>しゅんびん</sup>な動きで、ソファアの後ろに隠れてしまった。

「あ……」

うん、その動き、めっちゃ可愛<sup>かわい</sup>いです!!

「おはよう、エルダ」

「おはよう……いつから見たの？」

少<sup>せ</sup>しだけ顔を覗<sup>のぞ</sup>かせたエルダは、ちよつと涙目になっていた。

「ちよつと前……ソファアに寝ころんでジタバタしていたところからです」

「~~~~~ッ!!」

エルダはさらに赤面させて、ものすごい勢いで再びソファアの陰に隠れてしまった。

「い、い、今見たことは忘れて!! いいわね!」

またも顔を少しソファアの陰から出した彼女に、ものすごい剣幕で怒られてしまった。

よほど恥ずかしかったのか、ダッシュで俺の横を通り抜けて二階の自室へ戻ってしまった。  
なんて言ったらいいのかわからない。

ただ……エルダめっちゃ可愛<sup>かわい</sup>いんですけど!?

絶対狙ってやってるよね?

俺の好みをばつちり押さえすぎじゃないか!?

やばいやばいやばいやばい。

落ち着け俺!!

俺は気持ちを落ち着けるために、キッチンでお茶の準備を始めた。  
最近は慣れたもので、お茶くらいは自分で淹<sup>い</sup>れられるようになった。



自分用のお茶を淹<sup>い</sup>れてソファでくつろいでいると、エルダが二階から下りてきた。

「おはよう、カイト。早いわね？」

え？ ちよつと待って、さっきの出来事を一切なかったことにしようとしてませんか？

しかし、俺は空気が読める男。

「おはよう、エルダ。なんだか目が覚めちゃったからね。お茶淹<sup>い</sup>れようか？」

「お願い……………って、できるわけないわよ!! なに普通に返事してるのよ!!」

理不尽!!

ちゃんと空気読んだのに、結局怒られたんですけど!?

「とりあえず落ち着こうか。今お茶淹<sup>い</sup>れるから座ってて」

俺がキッチンへ向かうと、エルダはソファにそわそわという感じで腰を下ろした。

そして、見てしまった……

彼女が俺の飲みかけのお茶を飲もうかどうか迷っている姿を……

もう勘弁<sup>かんべん</sup>してください。

理性が限界突破しそうです!!

落ちつけ俺!!

深呼吸をしながら、お茶の準備を進めていく。

でもあれだよな。自分の淹<sup>い</sup>れたお茶を誰かに飲んでもらうって、地味に嬉しいものがあるね。

お茶の準備が終わり、わざと音を立てながらリビングへ運んでいくと、エルダはソファにきちんと座りなおしていた。

「どうぞ。熱いから気をつけてね？」

「あ、うん、ありがと。あちっ」

「言わんこっちゃない」

そんなやり取りをしつつ、ゆったりと朝を過ごした。

あれ？ そういえば、まだこれからのことを相談できてくない？

エルダと朝のひと時を満喫した俺は、今日の予定について話し合った。

「とりあえず、こんなところかな？」

「そうね、それでいいと思うわ」

その結論は、というと――

①冒険者ギルドに寄ってシャバズのおっちゃんと昨日のことをまとめる。

②その後に時間があれば、依頼を受けて貢献度<sup>かせ</sup>を稼ぐ。

③時間がかかった場合は、探索<sup>あきさ</sup>を諦めてそのまま帰ってくる。

こんな感じだ。

エルダが作ってくれた朝食を食べて、俺たちは冒険者ギルドへと足を運んだ。移動中、しきりにこちらを見てくるエルダがなんだか可愛く見えてくる。

これは一体どういうことなのだろうか……

何かのサインなんだろうか？

だがしかし、俺の勘違いってことも……

いや、ここは男らしく告白とかした方がいいのか！

いやいや、実は『どつきり大成功!!』っていうプラカードを準備しているとか！

いやいやいや、エルダがそんなことをするはずがない!!

いやいやいやいや、しかし……でも……

なんて迷ってたら、冒険者ギルドに着いてしまった。

結局ヘタレ全開でした……

チラリとエルダに視線を向けると、呆れ顔になっていた。

「バカ……」

小さな声が聞こえてきた気がする。

うん、ごめんなさい……

ギルド会館前まで来ると、エルダは冒険者のエルダに戻っていた。

このキリッとしたエルダもまたいいよなって思ってしまったのは、オフのときの彼女の可愛らし

さからすると仕方のないことだろう。

だけど、さっきのは本当に一体なんだったのか、わけがわからなくなってきた。

とりあえず、女心と秋の空。

俺にはどうやら理解が及ばないらしいです。

俺……鈍感じゃないはず？

ギルド会館に入ると、俺たちを見つけたキャサリンさんが、カウンターから手招きしていた。

「カイト君とエルダさん、おはようございます。ギルマスが呼んでますので、執務室まで来てくれるかしら」

「わかりました。カイト、行きましょう」

エルダが即答してしまった。

俺の返答は不要みたいだ。

もしかして頼られていない？

こうして俺たちは、キャサリンさんの案内で執務室へ移動した。

コンコンと、キャサリンさんがドアをノックする。

「ギルマス、二人をお連れしました」

「おう、いいぞ。入ってくれ」

そこはいつも通り、おっちゃん書類に埋もれていた。

何が“いい”のかさっぱりわからない。

どう考えても“いい”と言えないだろ、これ？

「ギルマス……早く書類仕事を片づけてください。二人とも、ソファアに座ってちょうだい。今お茶を淹<sup>い</sup>れるわね」

そう言うと、キャサリンさんは給湯室へ引ッ込んでしまった。

俺とエルダは言われた通り、ソファアに座って待つことにした。

カチコチカチコチ。

カツカツカツカツ。

時計の音と、おっちゃん<sup>お</sup>がペンを走らせる音が執務室に響き渡る。

カチコチカチコチ。

カツカツカツカツ。

まだ終わらないらしい。

その間に、キャサリンさんがお茶を持って戻ってきた。

「お待たせ。熱いから気をつけてね。今日のお茶菓子は、ギルマスの好物のカステラよ。棚にあつたからどうぞ」

「ありが……」

俺が受け取ろうとしたら――

「ちょっと待て!! それは俺が昨日やつと買えたやつじゃねえか!! まじでやめてくれ!!」

おっちゃんが必死の形相で訴えた。が……

「ん、ふお<sup>ち</sup>つ<sup>よ</sup>ふ<sup>お</sup>お<sup>お</sup>ふ<sup>お</sup>あ<sup>と</sup>つ<sup>お</sup>ふ<sup>あ</sup>ふ<sup>あ</sup>お<sup>よ</sup>？」

すまん、おっちゃん……すでに俺の口の中だわ……

エルダは……うん、頬<sup>ほ</sup>張<sup>は</sup>つてた。

ごちそうさまでした。

「まじかよ……」

やつと書類の片づけが終わったおっちゃんが、絶望の表情を浮かべている……

ごめん……めっちゃうまかったわ。

「いつまでも終わらせないあなたが悪いんです。少しは反省なさい!!」

「はい……」

キャサリンさんがおっちゃんを叱<sup>しか</sup>っている。

うん、どっちが上かわからなくなってきた。

それより話ってなんだろうな。

「ウォッホン。畜生……仕切り直した。まずは、昨日はご苦労さん。まあ、どうにかこちらの望み通りの結果になった。でだ、まずはシュミット公爵からこれを預かった」

おっちゃんを取り出したのは、一通の封筒だった。



公爵家の封蝨<sup>ふうろう</sup>がしてある。

おっちゃんによると、俺以外が開けると燃えるうえに、公爵へ通知が行くそうだ。

その封蝨<sup>ふうろう</sup>が魔道具<sup>まどうぐ</sup>になってるらしい。

本当にファンタジー万歳<sup>ばんざい</sup>だな。

封筒を開けると、一枚の手紙が入っていた。

『今日の会議、誠に有意義であった。おそらく今後について悩んでおることだろう。カイト、そなたはまず己の力を高めよ。それができなくば、今後降りかかるであろう困難を乗り越えることはできまい。よって、これはカール・フォン・シュミット公爵としての厳命である。今でき得ることを行い、己の力を高め、備えよ。いいな？』

うん、全力でフラグじゃねえかよ!!

マジで勘弁<sup>かんべん</sup>してくれ。

ただでさえキャパオーバーだつて言うのに……

ギルマスを見ると、ある程度話は聞いていたのだろう、薄笑いしていた。

手紙をエルダにも見せたが、同じく薄笑いをするしかなかったようだ。

「とまあ、そんな感じだ。カイト、お前さんはこれからガンガン依頼を受けて鍛えて<sup>きた</sup>もらうから覚悟しろよ。いいな？」

「いや、それはそれでいいんだけど……絶対さっきのお菓子の恨み<sup>うら</sup>入ってるだろう？」

おいおっさん、目をそらすな!!

「まあなんだ、力をつけるためには戦わなきゃなんねえし、ランクもあげねえと変な貴族の横やりも入るだろう？ だから頑張<sup>がんば</sup>るしかねえだろうがよ」

「わかりました、わかりましたよ!! やりやいいんでしょ!! まったく、ゆったりまったり生活はどこ行つたんだよ」

「それは、厄介事<sup>やっかいごと</sup>が全部解決してからのご褒美<sup>ほうび</sup>だと思えば頑張<sup>がんば</sup>れるだろう？」

ほんとにさ、いいように使われてるとしか思えなくなってきたな。

「公爵からの話はこまでだ。次にこれからのことだが……どうするか決まったか？」

「実はこれといってないんだよね。結局できることをやっていくしかないからさ。今はダンジョンに行つて、さらに奥に進むくらいしかできない」

おっちゃんからの質問にそう答えるしかなかった。

強くなるためには素材集め、戦闘、クラフトの三つをどうこなすかって話になってくる。

今回おっちゃんと相談して――

- ① 当面はダンジョン探索をメインとして地力をつける。
- ② 集まった素材で装備を新調する。
- ③ 定期的にクラフトを行い、スキルレベルを上げる。
- ④ 各ギルドからの製作依頼をこなす。

ということになった。

特に④の各ギルドからの製作依頼は、俺への指名依頼という形にすることになった。

つまりは、これをこなせば貢献度が稼<sup>かせ</sup>げて、楽に冒険者のランクを上げられるって寸法だ。

なんだかずるしている気がするが、気にしたら負けだ。

なんとなくだけど、何をするか決まると気持ちが悪くなった。

「それじゃあよ、一発目の指名依頼をこなしてみねえか？」

「面倒事じゃない限りはね」

俺が皮肉交じりにそう答えると、苦笑いを浮かべつつ、おっちゃんは机の上に一枚の依頼書を置いた。

そこにあつたサインは、間違いなくドルーのものだった。

「まあ、想像通りの商業ギルドからの依頼だ。内容は収納箱（簡易）の製作と納品だ。数は二十箱。報酬は一箱金貨十枚。合計二百枚だ。受けるだろ？」

「ああ、もちろん。約束したからには作らないわけにはいかないだろう？　というよりも、断つてもいいのか？」

ちよつと悪戯<sup>いたづら</sup>心が湧いてしまい、なんとなくそう口にしてしまった。

おっちゃんは首を横に振ると、そつとその依頼書のある部分を指さした。

そこには赤字で「ギルド依頼」と書かれていた。

「こいつがある場合、基本的には強制依頼だと思つてもらつていい。断ることは可能だ。だが……その分の貢献度の低下は馬鹿にできないがな」

おっちゃんはそう言つてニヤリと笑つた。

ほんと、こういうところは手回しがいいことで。

というわけで、俺は最初の指名依頼をこなすことになった。

もちろん、ドルーからの収納箱（簡易）の製作だ。

数は予定通りの二十箱。

「ついでだから、冒険者ギルド用の収納箱（簡易）の製作も請け負つてくれねえか？　条件は商業ギルドと同じで構わん。数は五箱。行けるか？」

なんだかんだで冒険者ギルド用の五箱も追加発注となった。

しかし、それだけの量を作るとなると、手持ちの木材では足りない。

どうしたものかとおっちゃんに相談したら、一発で解消した。

伝家の宝刀「ギルド依頼」だ。

すぐさまおっちゃんはサインをして一階に送り出した。

おっちゃん曰<sup>い</sup>く、数時間もしないで集まるはずだそうだ。

おっちゃんの言葉通り、木材はすぐに必要量が集まつた。

依頼は取り下げないため、木材はまだ送られてくるそうだ。これで、しばらくは木材の心配

はなくなったようだ。

というわけで、さっそく作業に取りかかった。

俺ははじめに机（簡易）と椅子（簡易）を製作する。

「おいおい、いきなり何作ってるんだ？ 依頼品じゃねえだろ、それ？」

「そうなんだけど。これがあるのとないのとは、全然作業効率が変わってくるんだ」

おっちゃんにその性能——SP回復速度上昇——を説明すると、是非とも作ってくれと頼まれてしまった。

それは、俺のことを木工ギルドに登録してからだって話したら、すでに全ギルドに登録済みだつて返答だった。

ほんと手回しいいな。

今回は木材を大量に集めてもらったので、順次作成していく。

正直この間、特に何か頑張ったってことはなかった。

椅子に座り、SPと素材を消費しながら製品を作る。

あまりに流れ作業なので、眠くなってきたのは内緒だ。

それから二時間くらい経っただろうか……依頼品が完成した。

依頼品の収納箱（簡易）が、商業ギルド用の二十箱と冒険者ギルド用の五箱。

あとは別途頼まれた机と椅子が多数。

うん、俺頑張ったよな？

ただその後が大変だった。

俺の前に金貨が積まれていく。

まずは商業ギルドからの報酬が金貨二百枚。

冒険者ギルドからの買取価格が金貨百五十枚。

合わせて三百五十枚。

今までの金策の苦労はなんだったんだろうな……

一気に大金持ちじゃないかな。

小市民の俺からしたら、まさに心配になる金額だった。

キャサリンさんに聞くと、冒険者ギルドでは銀行業もやっているらしく、高価なアイテムやお金を預かってくれるとのことだ。

さすがにこんな大金を持ち歩くわけにもいかないので、エルダと相談して金貨十枚分の銅貨以外を預けることにした。

しばらくして俺たちの目の前に「ドン!!」と布袋が置かれた。

その袋一つに銅貨百枚が入っており、数は十袋ある。

二つをエルダに渡し、食料の買い出し用に使ってもらった。

残りの八袋は俺のアイテムボックスへしまうことにした。

あとは必要なときに取り出して使う。

この金額には、エルダも若干引いていた。

おっちゃんとの必要な打ち合わせも終わったので解散となる。

時間を確認するとすでに昼を過ぎており、エルダと相談してこれから探索は無理と判断した。だから、今日は休息に充てることにした。

ということで、エルダは食料の買い出しに出かけていった。

俺はというと、薬師ギルドへ回復ポーションの材料を調達に向かった。

自分たちが使う最低限の回復ポーションをストックしておくためだ。

俺は、冒険者ギルドのすぐ目の前にある薬師ギルドへ足を運ぶ。

薬師ギルド会館へ入ると、少し気の抜けた元気な声が聞こえてきた。

受付カウンターから聞こえた声の主はエイミーだ。

ちょうど彼女が客を見送ったところなので、俺は彼女のところへ行く。

「こんにちは、エイミーさん」

「あ、お兄さんいらつしやうい。それとエイミーでいいよ。さん付けされるとなんだかむずがゆくなるしね。それで、今日は何をご用命かな？」

彼女はもうやら俺を気に入ったらしく、ニンマリと笑っている。

「今日は素材を買いに。ヒール草とスライムゼリー……あとは、弱毒草を買いに。あ、そうだ、他にも何か薬草類入ってる？」

そう、ここは薬師ギルド。

きつと俺の知らない薬草が集まっているはず!!

って、当たり前すぎるんだけどね。

はじめからここに来ていれば、いろいろ覚えられたかもしれないな。

ああ、今更だけどね。

「そうだね……ちょっと待って、在庫リスト確認するから。あ、あと、ギルドランクによって販売できるものも変わるから気をつけてね」

エイミーがそう言って裏に引っ込んでしまったせいで、手持ち無沙汰になってしまった。

どうにも落ち着かず、そわそわしている、後ろから声をかけられた。

「あれ？ 確かこの前来てくれた……カイトさん……でしたっけ？ 今日も買いものですか？」

声をかけてきたのは、エイミーと同じ受付嬢のミオさんだった。

なんというか、大和撫子(?)的な印象を受ける。

俺からしたら和装って感じなんだけど、この世界で和装という表現が通用するかわからないから、あえて言う必要はないだろうね。

それと、ミオさんはエルダとはまた違う美人だ。

きりりとした面立ちに凜とした佇まいがその美人度を上昇させている。

「ええ。薬の素材を仕入れに来ました」

「そうでしたか。エイミーは……つと、今確認作業中ですね。では、今しばらくお待ちください」

「あ、ミオ。おかえり」

奥から在庫の確認作業を終えたエイミーが顔を出した。

手には何やら目録的なものを持っている。

「ただいま帰りました。きちんと店番できましたか？」

「もお!! 子ども扱いはやめてよね!!」

ふくれっ面のエイミーもまたチャーミングだった。

なんていうか……そう、小動物的な？

それを見たミオさんはくすくすと笑っていて、なんだかほっとする場面だった。

「もう。えつと、お兄さんに今卸せるのはヒール草と弱毒草とスライムゼリーとパラライの実と眠り苔かな？ 今最低ランクだから、強い薬効の薬草は卸してあげられないんだよね。あと、パラライの実と眠り苔はどちらも銅貨二十枚ね」

「そっか、じゃあヒール草を百とスライムゼリーが五十。あと、弱毒草とパラライの実と眠り苔をそれぞれ十もらえるか？」

「「えっ？」」

なぜか二人が驚いて硬直してしまった。

別に驚く数じゃないと思うんだけどな。

回復ポーションが五十本作れる量でしかないんだから。

「どうしたの？ なんかまずかった？」

「いや、お兄さんが太っ腹だと思ってさ。正直窓口で大口購入する人は少ないんだよね。大口顧客は契約して窓口を経由せずに直接卸しちゃうからここに来ないんだ」

「なるほど。それって俺でもできるの？」

「ごめんなさい。カイトさんはまだ最低ランクだし、そもそも契約できるのは店舗を持っている薬師と錬金術師に限られてしまうのです」

エイミーが理由を説明してくれた。

ここに来るのは、駆け出しの薬師、錬金術師とか、あとは店舗を持たない人などが大半で、彼らに卸すのは回復ポーションでも十本作る程度の量が関の山なんだそうだ。

「そっか、教えてくれてありがとう。それで、数は準備できそう？」

「それはOKだよ。じゃあ、料金は全部込で金貨七枚と銀貨二枚」

「何が込々なんだかわからないけど、銅貨でもいいかい？」

「OK、銅貨なら七百二十枚ね」

俺は袋七つと二十枚の銅貨を取り出して、カウンターに置いた。

エイミーが物を取りに行っている間に、ミオさんが銅貨を数えていた。

「はい、確かにいただきました。じゃあ、領収証を発行しますね……………お待たせしました。これがあれば、品質に問題あったとき交換などができますので、なくさないでくださいね」

「あれ？ 前は貰もらわなかったよね？」

「これだけの数ですから、チェックが洩もれた商品が入っている場合があるので。そのためのものです」  
なるほど、商売に対して誠実だな。

勉強になる。

エイミーの準備が終わるまで、ミオさんと他愛たあいのないおしゃべりをしていた。

ミオさんはこの国の出身ではなく、この大陸より東に位置する島国「東武国」の出身なんだとか。そこでは米に似た穀物も取れるらしく、米に似た穀物を炊たいたものに合うようにと、また賢者様によって納豆が伝えられたとか。

一度は行ってみたいな東武国に。

それと、びっくりだったのは、ミオさんのお姉さんが、魔道具ギルドのギルマスのマイ・ウエマツさんだったことだ。

どうりで似た雰囲気ふんいきを持つてゐるわけだ。

しばらくすると、奥から商品を持つてエイミーが戻ってきた。

ものすごく重そうだったけど……

「お、お、重たかった」

ドンとカウンターに荷物を置いたエイミーは、息も絶え絶えで額の汗をぬぐった。

目の前には袋が四つ。

それぞれ薬草が分けて入れられていた。

「ねえ、エイミー。台車を使えば楽だったんじゃない？」

「それが聞いてよミオ。私が使おうとした台車を、ラッセルが無理やり持つていつちゃったんだよ。伯爵様の納品に使うから寄越よこせて言うて無理やりだよ。ひどくない？ こんなか弱い子に手で運はばせるなんてさあ」

どこにでもいるもんだなあ……

そういうやつには、いつか天罰が下くだるといいんだけどね。

「またラッセルさんですか……………わかったわ、ギルマスにはきちんと報告させてもらいます」

なんだかミオさんからただならぬ気配がする……

黒いオーラが見える!?

もしかして、ミオさんって武芸とかできる人？

ひょっとして俺より強いんじゃない？……………つてくらいの殺気を感じてしまった。

話はそれてしまったけど、持つてきてもらった薬草類を確認したら、品質が高いことがわかった。



正直言うと、どんないい素材を使っても、俺が作ると必ず品質が（低）になってしまうから、素材自体もこまでもいいものでなくてもいいんだが。

むしろ低い品質でも同じく（低）になるあたり、俺の作り方は異質なんだと改めて実感した。

エイミーたちもそれを察しているだろうに、それでもいいものを用意してくれたのは、薬師ギルドとしての矜持きんちなんだろうな。

「確かに。数量も問題ないね。ありがとうエイミー、重かったでしょ？」

ミオさんが、ヨシヨシとエイミーの頭を撫なでてねぎらう。

「ほんといやんなっちゃう!! あとで絶対ラッセルに悪戯いたづらしてやるんだから!!」

そう言うと、エイミーの目が「キラーン!!」ってなった気がした。

口元なんて小悪魔のようにニンマリとさせているし。

これ絶対、どんな悪戯いたづらしかけるか考えてる顔だ。

うん、この子もこの子で大概たいがいだな。

「じゃあ、これで失礼するね。また何かあつたら来ます」

「バイバイ。そのときはよろしくね」

「カイトさん、お気をつけて」

俺が貰もらった袋をそのまま持ち上げたらびっくりされた。

これでも一応冒険者だからね。

これくらいは……って、俺は本当に冒険者なんだろうか。

冒険者って、薬師ギルドで素材を買わないよね、普通。

まいつか、俺は俺だし。

あと、買ったものは薬師ギルド会館を出たら物陰で全部アイテムボックスにしまっただけだね。

買いものが終わり、薬師ギルド会館を後にした俺は自宅へと向かった。

途中変な気配らしきものを感じたけど、よくわからなかった。

一応警戒して歩いたものの、経験不足の俺はそれが何かまでは把握はあくすることができなかった。

まあ、きつと閣下の密偵が見張ってるからなんとかなるかなって楽観視していたのは事実だけだ。

「ただいま」

自宅に着くと、誰もいなかった。

エルダはまだ買いものの途中らしい。

よくよく考えると、エルダの行動って新妻みたいだよな……

新妻……手料理……えぷろん……

~~~~~っ!!!!!!

いかん!! 邪よこしまな考えを浮かべてはいけない!!

そう、エルダは同居人であり、パーティーメンバーだ。バディだ。

邪念を振りほどいた俺は、作業室に急いで移動した。

それにしても、ものが増えて作業室がどんどん手狭になっていくな。

そのうち改築しなきゃいけなくなるかも。

まあ、そのときはそのときか。

今はこの生活を安定させることを考えよう。

さてさて、取り出したるは買ってきた薬草!!

まずは初お目見えのパラライの実と眠り苔だ。

とりあえず鑑定してみよう。

スキル【鑑定】!!

パラライの実…果実で味は甘くておいしい。食べるとそのまましばらく数分動けなくなる。レッ

サーマンイーターの果実

眠り苔…湿地に生える苔。動くものが近づくと胞子を飛ばす。胞子を吸い込むと急激な睡眠に襲われる

おっと、どっちも危ないものだったな。

下手に口にしないで正解だ。

ピコン!!

『スキル…DIYのレシピが増えました』

やっぱり増えたか。

どれどれ。まあおおよその予想はつくけど……

技能…DIY レベル2……低級アイテムの作成

#### ▲薬 (NEW)

解眠ポーション (低) (NEW) ……ヒール草1 + 眠り苔1 + スライムゼリー1 + 精

製水1で1本作成。睡眠状態の回復。SP…5

解痺ポーション (低) (NEW) ……ヒール草1 + パラライの実1 + スライムゼリー

1 + 精製水1で1本作成。麻痺状態の回復。SP…5

よし来た。

これで、状態異常に対応できそうだ。

問題は、これを今持つてる素材でどれだけ作れるかってことなんだけどね。

回復ポーションと解毒ポーションも作らないといけないから、計算がメンドクサイ。

まあ、とりあえず二種類のポーションが作ればいいかな。

どれから順番に行くか……

俺は目の前に用意した薬草類の前で腕を組んで思案していた。

結局のところ、どれからスタートしても同じことなんだけどね……

うん、ここはまだ作ったことないポーションから作ればいいかな。

回復ポーションの在庫はまだあるし。

というわけで、解痺ポーション（低）から作ろう。

俺の今のSPが37で、これから作るポーションは大体消費SPが5か。

まあ、簡易薬物作業台で作るから問題ないでしょ。

「解痺ポーション（低）」×5。

目の前に準備していた薬草類のうち、解痺ポーションの素材となるものが光に飲み込まれていった。

ほんと、この現象はいつ見ても不思議でならないな。

『解痺ポーション（低）作成中。残り時間…10分。予約枠5／5』

ディスプレイに無事製薬を開始したと表示されていた。

あとは順次進める感じかな。

カツカツカツカツ。

そんなこんなで作業を進めていると、部屋の外から足音が聞こえてきた。

コンコンコンと、扉がノックされた。

「カイトいる？」

扉の外からエルダの声が聞こえてきた。

どうやら帰ってきたみたいだ。

って、もうこんな時間か……時間が経つのは早いものだね。

「いるよ。入っておいでよ」

ガチャリと、扉が開かれる。

「うわあ」

エルダの第一声が呆れ返った声だった。

解せぬ!!

「ねえ、前より物が増えてない？ 気のせい？」

「ほら、簡易薬物作業台とか精製水蒸留装置とか増えたからね。今はポーション系を量産中だよ」

そう言って簡易薬物作業台の上を指差すと、さらに呆れた顔になっていた。

簡易薬物作業台の上には解痺ポーション（低）が十本に、解眠ポーション（低）が十本。さらに、解毒ポーション（低）が五本載っていた。

「ねえ、カイト。あなたのお店でも始めるの？ それより、この材料費っていくらかったの？」

「え？ これは自分たちで使う分だからね。材料費は金貨七枚強？」

あれ？ エルダの目からハイライトが消えただど！

なんか嫌な予感しかしいんですが……

「ねえ、カイト君。金貨七枚ってどんな金額かわかるかな？ かな？」

「えっと……」

「金貨七枚あれば、一家族が余裕で一か月は暮らせる金額なんだよ？ それが、なんで一瞬でなくなってるのかな？ かな？」

やばい。真面目にやばい。こ、これを切り抜けねば殺される!!

ピコン!!

『解毒ポーション(低)×5が作成完了しました』

このタイミングじゃないだろ!!

って、そうだ!! これだ!! エルダも巻き込めばいいんだ!!

「エルダさんや、ちよつと実験を手伝ってくれないかな？ これが成功すれば、きつと今より稼かせぎが増えるはずだから」

「本当に？」

エルダの顔色がみるみる戻っていく。

どうやらピンチを乗り切ったらしい。

「そうそう、前に俺の作った設備が他の人が使えるかわからないって言ったでしょ？ エルダが使用可能なら、この設備を貸し出しできるんじゃないかと思って。あくまで貸し出しで、半永久的にお金が舞い込む的な？」

エルダの表情が明るくなっていく……

なんだろう……

エルダのキャラがわからなくなってきた。

今朝の可愛かわいいエルダはどこにいつ……ひいつ!!

「何か言ったカイト？」

どうして殺気を込めて名前を呼ぶのかな？

とりあえず、残っているのは回復ポーション(低)の材料だったので、エルダには回復ポーション(低)を作ってもらうことにした。

「じゃあ、その簡易薬物作業台に触れて、作成するってイメージしてみて」

「こう？」

するとエルダのイメージに反応して、いつもの透明な板が浮かび上がった。

「なにこれすごい!! カイト!! これすごいんだけど、どうなってるの!？」

「それは俺もよくわかってないんだ。じゃあ、次にこの素材を作業台の上に置いてもらっていい？」



エルダは興奮しながら回復ポーション（低）五本分の材料を簡易薬物作業台の上に置いた。

「じゃあ、その透明な板に『回復ポーション（低）』ってレシビがあるか確認してもらってもいい？」

「ちょっと待ってて……あった、これね」

「よかった。あとは簡単。声に出してアイテム名を読めばOKだよ」

「わかったやってみる。回復ポーション（低）」

エルダの声に反応して簡易薬物作業台が光を放った。

簡易薬物作業台の上の材料はその光に吸い込まれていく。

「カイト!! これということ!? なんかいきなりSPが持っていかれて気持ちが悪かったわよ!!」

「じゃあ、またさっきの透明な板を呼び出してみて」

エルダが簡易薬物作業台に手を置いて、透明な板を呼び出した。

「あ、作業中になってる」

「よし!! エルダ成功だよ!!」

俺は大声を上げてから、エルダの両肩を掴んだ。

「エルダ、これで君も俺と一蓮托生になったよ……」

「え？」

エルダから素っ頓狂な声が返ってきて面白かった。

これで確定してしまった。

俺を起点に、産業革命を起こすことができる。

俺が作る作業台で、なんの知識もない一般人がポジションを作成可能。

SPさえあれば“誰でも”作れる。

今はまだ低品質のもののしか作れないけど、いずれは最高品質だって作れる可能性がある。

それができなくとも一定品質のものを一般人が作れる。

逆に言えば、これまで手を抜いていた職人たちは淘汰とうたされてしまうだろう。

うん、これはかなり難しい問題だな。

さすがに、俺の手に余る。

本来であればおっちゃんを巻き込みたいところだけど、このところ負担をかけまくっているから言いづらいんだよな。

うん、ここはひとつ……

「エルダさんや、ものは相談なんだが……この話は秘密にしてもらえるかい？」

「なんのことですか？ わたしはだいじょうぶ。わたしはなにもみていない。ワタシハナニモシラナイ」

あ、だめだ……完全に現実逃避しちゃったよ。

もう一度エルダの肩を掴んで何度か揺さぶってみたけど、こちらに戻ってくる気配はないよう

だ……

ホントこれ、どうしたらいいんだ……

「エルダさん。エルダさんや。こっち戻つといいで」

さてどうしたものか……

ずっと呼びかけても全くこっちを見るそぶりすらない。

なんかブツブツ言ってるし。

仕方ない……これはやりたくなかったんだけどな。

最後の手段に頼らざるを得ないか。

エルダ、ごめん。

俺は意を決して、いまだ現実逃避しながら椅子いすにもたれかかっているエルダの顔に近づく。もう少してエルダの唇くちびるに触れそうになる……

そして俺は……

むぎゅっ!!

エルダの鼻を全力でつまんだ。

「痛あ~~~~い!! 何するのよ、カイト!! 痛いじゃないの!!」

「やっと正気に戻ったみたいだね。お帰り、エルダ」

「ほんと、カイトのせいだからね？ 私をこれ以上厄介事やっかいごとに巻き込まないでほしいわ!!」



本当にごめんなさい。

巻き込んだっていうか、なんというか……

そうやってしまったわけです、はい。

「そうだ、エルダってどうしてここに来たんだ？」

「あ、忘れてた!! 晩ご飯ができたから呼びに来たのよ」

「それ先に言おうか……」

「ごめんなさい」

俺たちはダイニングに移動し、遅い夕食をとることになった。

冷めてもうまいエルダの料理に感謝。

夕食を食べ終わったところ、エルダから質問があった。

「ねえ、なし崩し的にダンジョンとか行けてなかったけど、これからどうするの？」

「そうだな、そろそろ本格的にダンジョン探索を試みたいし、他の国も見みたい」

「そのためには、ギルドランクを上げないとね」

エルダからの指摘はもっともだった。

前から話にあがっていたギルドランク。

せめてAランクにならないと、国外での行動に支障を来<sup>きた</sup>してしまう。

そのためには、ギルドランクを上げる必要があるということだ。

「明日からはまた、鉱山跡地ダンジョンかな？」

「そうね、そうなるわね。ただ……」

あれ？　なんでそこで言<sup>い</sup>淀<sup>もど</sup>むのさ？

なんか問題でもあるのかな？

「ただ……どうしたの？」

「カイトの装備が心もとないわ。できればもっといいものに替えていかないと。今カイトが作れる装備ってどんなものか？」

来た……

この質問が来てしまった……

できれば装備したくないのだけれども……

「ええっと、その、あの〜」

「はつきりなさい!!」

ドンッという音とともに床が震えた。

エルダが足で床を強く踏み鳴らしたのだ。

「はい!! ロックワーム——岩<sup>がんせんちゅう</sup>蠕虫のシリーズ装備が作れるようになったであります!!」

「そう、ならそれをまず作りましょう。その後さらに奥のダンジョンに潜ります。いいですね!!」

「イエス、マアム!!」

俺はつい敬礼をしながら答えてしまった。

それを見たエルダはキョトンとしていたが、気にしたら負けだ。

しかし、岩蠕虫がんぜんちゅうの装備には若干の抵抗がある。

だって、岩ミミズだよ？ あの大巨なミミズだよ？

誰が好き好んで着るものか。

「だけどエルダ……さすがにミミズ装備はその……ね？」

「贅沢ぜいたくを言ってる場合じゃないでしょ？」

た、確かにそうなんだよね……

しかし、せめてミミズは勘弁かんべんしてほしい……

「じゃあ、虫系以外の素材ってないの？」

「たぶんあると思うわよ？ 鍛冶かじギルドか魔道具ギルド、あとは錬金術ギルドかな？ 素材を売っ

てもらえばいい話よ。でもそれでいいの？ あなたは世界を見たいんじゃないの？ 自分の手で集

めて、自分の手で作る。そうしたいんじゃないの？ 違う？」

うぐつ。

ほんと、エルダはよくわかっていらつしやる。

その通りなんだよね。

買って作るのが一番早いつていうのはわかってるんだ。

今回のポーションだって、素材を買って作ったんだから。

でもやっぱり、何かが違う気がしてしまった。

自分で集めて作るからいいのであって、俺は職人になりたいわけじゃないんだ……

俺は『自由』に生きたいんだから……

「あ、ちなみになんだけど。鉱山跡地ダンジョンの第十一層以降に地底湖があるの。でね、その地底湖には垂竜人あつりゅうじん……リザードマンが生息しているわよ。つまり、リザードマン系の装備が作成でき

る可能性があるってこと。どう？ 行ってみたい？」

「マジで!? 行く行く!! 絶対行きたい!!」

これはマジで頑張がんばらないとな。

まずは岩蠕虫がんぜんちゅうの装備作って、強くなつて……

目指せリザードマン狩り!!

「じゃあ、明日からは鉱山跡地ダンジョンつてことでいいのか？」

「そうね、それでいいと思うわ」

これで行動指針が決まった。

明日朝一で冒険者ギルドへ行つて、ギルマスに面倒事を全部ぶん投げる。

その後に依頼を受けて、ダンジョン探索へ。

徹底的にロックワームを倒しまくって、装備を作る。

で、第十一階層以降のリザードマン狩り。

素晴らしい!! これでなんとかなる!!

俺の計画は完璧すぎるほど完璧だ!!

「あ、忘れてた。リザードマンがいる場所って地底湖だから、耐水装備を準備しないと。カイト持っていないでしょ?」

「え?」

どういうこと?

……………あつ!! そつか!!

ロックワームは水が弱点だから、その装備で行くと……

丸裸!?

お婿むこに行けなくなっちゃう。

「カイト……変な妄想もうそうしないでね? いいわね?」

「はい……」

なぜいつも考えが読まれるんだ!?

って、また声に出てたのか?

「そこで提案です。まずは岩蠕虫がんぜんちゅう装備で全身を覆います。ただ、リザードマン対策には向きません。

なので、一度森の奥の『新緑しんりょくのダンジョン』へ向かいます。そこではオークが多く生息しています。

ちなみに、エルフ族の天敵で一匹銅貨三十枚の報酬ほうごうが支払われるわ。つまり、オークを倒してその素材で装備を整えるの。ここまではいい?」

「いいんだけど……オークって、あの亜人種的なモンスターだろ? その装備って言ったら……」

「そうね、オークの皮をメインで作成するものになるわね。ちなみに、オーク装備は脱初心者って言われているわ。鍛冶屋にはよく持ち込まれる素材だもの」

オークか……

エルフ族の天敵……

つまり……

はっ!! あれか!?

まさかの「くっ!! 殺せ!!」的な!?

そんなフラグなのか!?

「……………話を進めていい?」

エルダの表情から笑みが消えた。

ものすごく睨にらまれています……

エルダの視線がつかいです。

「続けるわ。そしてオーク装備がそろったところで、今度は湿地帯しつちたいにある『湿地しつちのダンジョン』に

挑戦ね。ここではマッドフロッグなどの爬虫類系がよく出てくるわ。こいつらはもれなく耐水性質を持っているから、水属性ダンジョンの初期装備としては持って来いよ」

「亜人型モンスターの次は爬虫類。そして今度は亜竜人。うん、モンスターまみれだな……」

「しかたないわよ。さすがに魔法金属系の装備は買えないもの。剣一本で金貨五百枚は軽く飛ぶわよ？」

俺はそれを聞いて、一瞬にして心が折れてしまった。

俺は夢見ていたんだ……

ファンタジー系金属の存在に。

そして、必ずこの手で加工してみせるんだって……

剣で五百枚……無理だ。

……って、あれ？ 行けるんじゃない？

収納箱（簡易）を裏で大量に売りさばけば、あつという間に貯まるんじゃない？

「あなた……犯罪者になりたいんだったら止めないけど、どうする？」

「いえ、やりません」

うん、俺はいたって真面目な一庶民としてこの世界を旅したいです!!

逃避行なんてごめん被りたい。

「まあ、正直なところ、すべての装備品を金属製にすることはお勧めしないわよ？ 素材で最高級

なのは龍族だもの。墮龍の討伐や、龍族と親交ができて剥がれた龍鱗や抜けた髪なんかを分けてもらうなんて方法で集めるんだけど、現存する装備の中の最高峰は龍鱗系装備なのよ」

「わかった……地道にやっていくことにするよ。ありがとうエルダ、道が見えてきたよ」

「ん、どういたしまして」

エルダと話したことによって、より明確になった方向性は――

①岩蠕虫装備。

②金属回収。

③鉱山跡地ダンジョン第十層のボス部屋の攻略。

④新緑のダンジョンでオーク狩り。

⑤湿地のダンジョンで爬虫類狩り。

⑥鉱山跡地ダンジョンで第十一層以降のリザードマン狩り。

うん、こんなところかな？

これで、やっと前に進める気がしてきた。

今までは特に目標とか目的とか決めてなかったけど、こうやって決まると、なんとなく気が引き締まる感じがする。

これもエルダのおかげかな？

そう考えたら、これからが俺の本当の意味での異世界生活ってわけだ。

「そうだ、エルダはマジックバッグみたいなものって持ってるの？」

「持っていないわね。代わりにポーションホルダーを身に着けたり、バックパックを背負ったりしてるわ。ただ、カイトがいればポーションホルダーだけでいいと思ってしまうのよね」

「なるほどね。じゃあ、でき立ての各種ポーションを持っていってもらっていいかな？」

「そう言うと、俺はアイテムボックスから各種ポーションを取り出し、エルダに渡した。

これで、何かあっても回復ができるはずだ。

俺しか持つてなかったら、俺に万が一が起こつても対応ができないからね。

「もしかして……このためにポーション系を作成していたの？」

「まあ、そうだな。俺たちには回復役がいらないから、アイテムは生命線になるからな」

「そう。ありがとう」

エルダはそう言うと、俺がテーブルに出したポーションを回収して自室へと戻っていった。

おそらく明日の準備をするのだろう。

夜も更けてきたことだし、俺も自室に戻ることにした。

それにしてもここ数日、濃すぎやしませんか？

俺一般市民だよ？

まったく、この世界は飽きないな……

## ■二十六日目 買い食いのうまさといらないこと

「ん……ん……朝か……」

目覚めると、部屋に暖かな日が差し込んでいた。

「ん？ これは？」

そんなすがすがしい朝。ふとベッドを見ておかしな点があった。

俺の横になんだかへこんだ跡がある……

おそらく人の形。

誰か寝ていたかのような、そんな跡だ……

いや、まさか………ね？

「そんなわけはないか……夢………だよな？」

俺はそんな考えを振り払うかのように頭を振った。

それから着替えて、リビングへ向かった。

階段を下りる際に、リビングでくつろぐエルダを発見した。

「おはようエルダ。昨日はごめん。変なことに巻き込んでしまったみたいだ」

「まったくね……でもまあ、仕方ないわね。カイトというつていうことは、そういうことだから。」